

キリスト教学校教育同盟と関西学院—ベーツ院長の関わりを中心として—

神 田 健 次 (学院史編纂室長)

キリスト教学校教育同盟は、日本のプロテスタント系のキリスト教主義学校 98 の学校法人によって組織されている団体である。1910 年に創設されて以降、一昨年(2019)の 11 月に 100 周年を迎え、『キリスト教学校教育同盟百年史 年表』が刊行され、そして、今年(2020)の 6 月には『キリスト教学校教育同盟百年史 通史編』と『資料編』が刊行される運びとなった。編纂委員会には、学院からは顧問として山内一郎名誉教授が、また編纂委員として筆者が依頼を受けて関わってきた。筆者は、キリスト教学校教育同盟の結成(第 1 部第 1 章)、そして教育同盟より 1939 年に出版された『聖書教科書』全 5 巻の内容的分析(第 2 部第 2 章)、及び 1959 年に出版された『聖書教科書』全 7 巻の内容的分析(第 4 部第 2 章)の項目を執筆担当した。

共同の編纂事業に関わることを通して、改めて教育同盟及び関西学院を含むキリスト教主義学校の歴史を回顧するよき機会となった。特に、教育同盟創設以降、関西学院が一貫して重要な役割と貢献を果たしてきたことが明らかにされた。例えば、戦前だけでも第 3 回総会(1912 年)、第 9 回総会(1919 年)、第 13 回総会(1924 年)、第 22 回総会(1933 年)、そして第 27 回総会(1939 年)と 5 回の総会の開催校となり、また、執行部や諸委員会において多様な指導的役割を担ってきている。にも拘わらず、例えば『関西学院百年史』には教育同盟との関係がほとんど言及されていない点も明らかとなった。ここでは、戦前における学院と教育同盟との関係、とりわけベーツ先生の関わりを中心に述べてみたい。

ベーツ会長の「開會ノ演説」(1925 年)

教育同盟におけるベーツ先生の貢献についてはいくつか重要な貢献が挙げられるが、まず特筆すべきことは、1925(大正 14)年に開催された第 14 回総会において院長として出席し、教育同盟の会長に選出されたことである。そして、その総会の冒頭で、会長として「開會ノ演説」(『第十四回總會記録』18-30 頁)を行っている。

この演説において、ベーツ先生が強調している第一の点は、キリスト教主義学校の使命についてである。激動する国内外の時代状況の中で、ベーツ先生は、キリスト教主義学校における日本人と外国人との共同の働きに言及し、キリスト教主義の教育者としての使命について、「我々基督教主義ノ学校トシテ特殊ノ使命ハ此所ニアルト信ズルノデアリマス。此信仰ヲ分チ、此経験ヲ伝ヘ、此見解ヲ生徒ニ与ヘテ十分ニ心ノ中ニ神ノ国ヲ蔵スル新国民ヲ生ゼシメ神ヲ知り、人類相互ニ対スル信頼ノ念強キ男女ヲ造ル、是ガ我々基督教主義ノ教育者トシテノ使命デアリマス」と力説している。第二に注目したいのは、教育同盟の国際的な連帯の必要性を強く呼びかけている点である。具体的には、「私ハコノ基督教教育同盟会ガ世界教育連盟ノ一員トナリ、七月ニエディンバラデ開カレル大会ニ、代表者ヲ任命シテ送ル事ヲ提議スルノデアリマス。私ハ本同盟ハ総テノカクノ如キ国際的ノ教育上ノ集会ニハ代表者ヲ送ルベキデアル」と、世界教育連盟に加盟し、その大会に代表者を送ることを提言している。ここには、キリスト教主義学校の教育内容の協議にとって国際的な連帯と視野が不可欠であるというベーツ先生の認識が、強く反映していると言えるであろう。

第三に注目したいのは、世界平和の理念を鮮明に表明している点である。特に、1925 年から全国の中学校から大学にいたるまで正課として軍事教練が実施されるという事態に直面し、ベーツ先生は、「基督教主義ノ男子学校デ当面ノ解決スベキ重大問題」と述べている。そして、この困難な問題に対して、一面法律を守る大切さを強調しつつも、他面キリスト教主義学校として、「軍国主義ニ対シテ断乎トシテ反対スルモノデアリマス」と述べている。そして、「世界ノ平和、戦争ノ無イ世界トイフ理想ハ是ヲ実現スルニハ長イ年月ヲ要スルモノデアリシテモ是ヲ希望シ、祈リ、常に其実現ニ努力シツツケネバナラナイ」と述べ、その旨を決議することを呼びかけている。第四に、キリスト教主義学校の課題として、「一ツハ小學校ガ足りナイ事デ、モーツハ専門學校程度ノ方面デ理科ガ欠ケテ居ル事デアルト思ヒマス」と、初等教育が大きく不足している事と理科系の設置の必要性に言及しているの

ある。当時、キリスト教主義の小学校は43校であったが、一貫教育の視点からすればまだまだ不足している状況であり、また理科系の専門学校も存在していなかった現状が窺える。特に後者の場合、キリスト教主義学校において「宗教ト科学トハ共ニ手ヲ携ヘテ進」む必要性があるという、強い認識があったと言える。

この演説において、ベーツ先生は、総会における審議事項として、世界教育に同盟から代表者を送る件と、軍事教育の中止を要求する件の二つの事項を決議することを提議しているが、総会では、前者については常務委員会に付託すると前向きに審議されている。後者については議題となることはなかったが、開会演説において、世界平和の理念を掲げつつ、軍国主義へと向かう時代的動向に対して警鐘を鳴らした意義は決して小さくはないであろう。



1924～25年頃のC. J. L. ベーツ

「基督教主義教育の原理」(1933年)

教育同盟におけるベーツ先生のもう一つ特筆すべき貢献は、「基督教主義教育の原理」を提言したことである。これまでこの文章は、いっどこで、そして何のために書かれたか不明であり、大学昇格問題がクローズアップされていた1920年代前半に学内向けに書かれたものと推察されていた。しかし、今回の編纂過程で明らかとなったことは、このベーツ先生の文章は、学内に向けて書かれた文章ではなく、教育同盟において一つの重要な問題提起となった文章であることであった。即ち、第22回総会(1933年)においてベーツ先生は、各学校におけるキリスト教主義教育の意識を明確にし、対内的および対外的に表明する趣旨で、「基督教主義教育宣言」作成を提案し、そして、翌年の第7回同盟の夏期学校において、「基督教々育原理の宣言」として提示したのが、この「基督教主義教育の原理」に他ならない(『建学の精神考 第2集 キリスト教主義教育の検討』1-4頁)。

「原理」の冒頭で、ベーツ先生は、「基督教主義学校に於て実施されている教育に対する我等の観念を明確にし、信念を強固にすべき秋が到来した」と述べている。そして第一の原理として、「教育と宗教との必然的關係である。人性は単に物的許りでなく、同時に又道徳的並に靈的である。従って人性の初めの様相のみを目的とする教育は不充分である」と、教育と宗教の不可分の關係について強調している。第二の原理として、キリスト教的な新社会の秩序を創造する目的を達するために、個々の男女が新たに生れ、彼等が「キリストに於て示されている新生活に入る事が必要である」と、教育の個人的、共同的側面が描写されている。さらに第三の原理は、「社会理想である」とし、「基督教は、この世には何らかの間違ひがある、この世は改良され、其自体から救はれねばならない、と言ふ事を確信しており、又従来常に然く確信して来たので、今や世界が改良を必要としているという事を明確に意識し、「われ等の経済問題を道徳的、人格的、基督教の見解より考察する事が必要である」と叙述している。

第四の原理として、「基督教と日本精神との關係は、われ等の直面しなければならない、最も重要な問題の一つである」と指摘し、イエスが「カイザルの物はカイザルに、神のものは神に納めよ」と語っているように、「われ等は國家に或義務を負ふてゐる」と述べる。そして第五の原理として、国際主義の精神があげられ、「国際主義に関しては基督教は世界的宗教である。其れは宛も太陽の如くに眞実に凡ての人に属してゐる。太陽は事實は常に日々に新たに凡ての土地と民族の上に昇るのであるけれども表見的には東に昇り西に沈むのである」と叙述される。最後に、「若も凡て人々が先ず神の意志を知らんと求め、次にその意志を実行する方法を求むるならば、個人的、家庭的、社会的、経済的、國家的及び国際的諸問題は遙に容易に解決されるであらうと信ずる」と結んでいる。

ベーツ先生の「基督教主義教育の原理」は、教育同盟の論議では、東北学院のシュネーダー氏の案と併せて検討され、最終的には、キリスト教主義教育の目的や根本原理を示す文書「基督教主義教育の要旨」としてまとめられ、第24回総会(1935年)において決議されている。作成から決議に至るまでの時期は、それまでの教育勅語に基づく教育体制に学校教練が加わることで、キリスト教主義学校におけるキリスト教主義教育の実施が困難となった時期であっただけに、ベーツ先生の問題提起と貢献は大きな意義をもっていたと言えるであろう。